

海外実習が参加者に与えたフランス語・フランス文化理解への影響について

Influences of Study abroad programme :French language acquisition and Cultural appreciation

小坂 修
KOSAKA Osamu

はじめに

本学において2001年度より「海外社会実習」がカリキュラムに採用され、同年、カリキュラム施行後初の海外社会実習をフランスにおいて実施することとなった。当時、参加者は2名であり、また期間は2004年度のフランス社会実習よりも1週間長く、7月末から8月にかけての約25日間であった。僅か2名の参加者のために、フライト、交通機関やホテルの予約、トラベラーズチェックの手配をはじめとして、研修校や寮との連絡業務、また事前研修など、準備段階から相当な時間を費やし、その上出発から帰国まで担当教員が付き添うことに関しては、担当者自身、疑問に思うこともなくはなかったが、第一回目ということもあり、当時の国際交流センター長、また大学による決定の下、ゴーサインが出された。

当時、参加者は、いずれも本学のフランス語科目の受講者であり、一人は2年生、他は3年生であった。両学生とも、受講期間ほとんど欠席もなく、極めて真摯にフランス語に取り組み、試験成績もよく非常に優秀な学生であった。そういうこともあり、現地においても、少しはフランス語を理解し、コミュニケーションのツールとして用いることは可能ではないかと、出発前、期待とともに考えていた。その上、出発前の期間、フランス語研修を1.5時間ずつ、週2、3度実施し、あいさつやお金のやり取りの際に必要な数字など、絶対的に必要と思われる会話表現の表現習得に相当力を入れて学習したこともあり、なおのことそのような期待感が強かったことは否めない。しかし、現地では全く予想に反して、フランス語が必要となる場面、例えば、何か尋ねられ *Trois, s'il vous plaît*. 「3つお願いします」程度の表現ですら、まるで口が凍りついたかのように動かない様子を目の当たりにして、非常な衝撃を受け、担当教員としては茫然自失の体であったとあってよく、その時々光景は今でも忘れることはできない。本学の「海外社会実習」が語学学習のみを目的とするものでないにせよ、ことばの理解を不問として「海外実習」を実施するなら、「海外実習」とは何かということを改めて考えざるを得ず、この体験に思いを馳せるたびに、このような短期の語学学習と現地の生活体験の意味、またそれがどのような形で学生にフィードバックされるものであるか、大学での授業のあり方の検討も含め、その後関心を持ち続けることとなった。

海外で生活すれば、自動的かつ無意識的に言語学習が可能となると捉える傾向が相変わらず強いが、勿論必ずしもそうではなく、滞在の仕方、現地での学習のありようによっては、学習者の間には天と地ほどの違いが生ずることは一般に広く知られている。すなわち「単につかっているだけではまったく修得できない」¹⁾ ことは余りにも明らかである。しかも、同国人と多く行動を共にし、現地人とのコミュニケーションにはごく少数の限られた表現を繰り返し用いて生活するといったパターンは、海外で生活する日本人をはじめとするアジア人には従来よく見られた現象であり、語学的にも文化理解の面においても海

外体験がそのような閉ざされた体験に収斂してしまうのはいかにも残念ではあるが、外国語習得に血なまことならずとも、現地での生活は可能なのである。そのようなケースが勿論全てではないが、多く見られる例であることは事実である。

どのような形の滞在また学習経験が望ましいか、そのことを念頭におきつつ、今回（2004年実施）の参加者のフランス語の学力を出発前、帰国後、二度にわたって調査した。被験者の人数が少なく、そこから有効な結果が得られるかどうか若干不安に思わないわけではないが、本学の語学科目、また海外実習の意義またそのありようについて考える機会となるようお願いしつつ、あえて取り組む次第である。また、昨年よりFD研究活動が本学において推進されているが、このささやかな報告をFD研究の一環として理解していただきたいとの意図ももっている。

まず、参加者の学習歴とテスト結果の相関関係を確認してきたい。

1. 研修参加者のフランス語学習歴

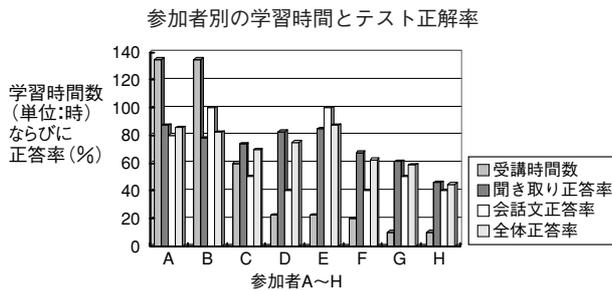
2004年は、18名の参加希望者があったが、その中から、フランス語を本学において何らかの形で学んでおり、帰国後もフランス語を学習するという条件として選考を行い、8名の参加者を決定した。その8名をA～H、として、フランス語学習歴からまず明らかにしたい。

- A：本学における学習歴：約135時間学習、12単位取得（但し、ここ一年半は本学における学習経験はなし）
- B：本学における学習歴：約135時間学習、12単位取得（但し、ここ一年半は本学における学習経験はなし）
- C：本学における学習歴：約60時間、4単位取得
- D：本学における学習歴：22.5時間
- E：本学における学習歴：22.5時間
- F：本学における学習歴：20時間
- G：本学における学習歴：10時間
- H：本学における学習歴：10時間

以上である。本学の授業以外には参加者のフランス語学習経験は皆無であり、本学の授業のみが参加者にとっての学習歴であるが、その学習歴には相当な開きがあることが分かる。まず、この学習歴と、出発前に行ったテストの相関関係の確認から始めたい。正答率は以下の図表に示す通りである。

氏名	正答率	聞き取り正答数/問題数	聞き取り正答率	会話文正答数/問題数	会話文正答率	全体正答率
A		40/46	87.0%	8/10	80%	85.7%
B		36/46	78.3%	10/10	100%	82.1%
C		34/46	73.9%	5/10	50%	69.6%
D		38/46	82.6%	4/10	40%	75.0%
E		39/46	84.5%	10/10	100%	87.5%
F		31/46	67.4%	4/10	40%	62.5%
G		28/46	60.9%	5/10	50%	58.9%
H		21/46	45.7%	4/10	40%	44.6%

以下は上記を受講時間数との関連においてグラフ化したものである。受講時間は、時間数により、また、テスト結果は、満点を100として%で表示した。



被験者 A～H までの得点率、正答率と学習時間をグラフで示すと、完全には行かないが、学習時間数をかなり忠実に反映していることがわかる。しかも、A, B, E は、本学のフランス語科目の定期試験においても優秀な成績をとっており、それともほぼ一致した結果となっているが、A, B が、学習時間ならびに本学の中間・期末試験の非常に優秀な成績に反して、全体正答率が、E より劣るのは一年半近いブランクがフランス語学習にあったからと想像される。また、テスト問題は本学の一年次において使用している教科書をベースに作成したものであり、その意味では、E は現役であり、A, B は学習後、ブランクのある卒業生に喩えることができる。全体的に見ると、「聞きとり」に関しては、そのブランクの影響が、「会話文」より大きく作用するようである。なお、学習時間が短時間のわりには E が突出して正答率が高いのは本人の資質が影響していると考えざるを得ない。

テスト問題は *Un peu de français* (第1版) を利用した。一例を示しておきたい。

被験者は、以下の1～8を聴き、「私は星を見るのが好きです」に相当するフランス語文を選択するよう指示されている。勿論、1～8のフランス語文自体は問題には収録されていない。

1. J'aime regarder la télévision.
2. J'aime chanter.
3. J'aime aller à la mer.
- (4～7は省略)
8. J'aime regarder les étoiles.

被験者は、テープを聴きながらそれに相当するフランス語と思われる文番号にチェックをいれる。テープは一度だけ聴くこととし、回答に関しては、○、また訂正には◎を用いるよう指示した。また、TOEIC テストなどでも、そうであるが、たとえばはっきり分からなくとも、とに角それに近いと思われる回答を必ず選ぶように注意した。

テストは聴解力の確認と会話文型の理解度の確認に重点をおいたものであるが、実際には試験問題の性質上、欠点として、フランス語文型の根本的な理解を試すという点については、やや弱点があることは正直に認めざるを得ない。例えば、上記の例についてもそうだが、「私はこの機械を使ってもよいですか」の場合、*Est-ce que je peux?* は共通であり、被験者はそれ自体の意味がたとえ分からなくとも、対項としての *aller à la mer, chanter, venir, aller au concert, entrer, fumer, utiliser cette machine, utiliser votre voiture*, これらのパラダイムから対応する部分聞き分ければよいわけである。それは必ずしも正確な意味が分からなくとも他との異なりが分かればよいと

いうことでもあり、曖昧な感じができることは否めないが、語の関係性は言語の本質であり、テスト問題としては、致命的な問題点とはならないものと考えている。少なくとも、最も重要な点である、出発前/帰国後の比較をする上においては障壁とはならないと判断した。

テスト問題はすでに言及したように *Un peu de français* を利用して作成したが、語彙的に見ると、98% はマトレ教授が、『初級仏仏辞書』において見出し語として取り上げた *des mots réduits*²⁾ 「厳選された」 *usuel*³⁾ 「よく用いられる」5000語の一部であり、日常性の非常に高い語のみが出題されたということが出来る。日常性が高いという点においては、現地での体験が、帰国後のテストにその結果が反映しやすいとの考えも可能であろう。

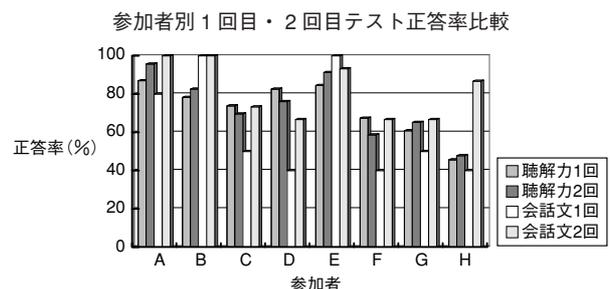
海外研修出発前の時点において、被験者は聴解力テストについては72.6%の正答率に示される理解力または識別力を示しており、学習歴を考慮すると比較的高い理解力を示しているといえる。また、ほとんど20時間余りの学習歴しか持たない学生でもある程度の成績を示しているのは、不思議に思える現象ではあるが、*café* や *petit* のように、外来語として日本語の中に定着した語も少なからずあることによるものと思われる。さらに、英語の語彙の30%近くは、フランス語もしくはラテン語起源といわれている以上、その結果、類推によりフランス語も理解できるケースがあるにしても当然と思われる。

2. 帰国後の検査結果

帰国後、間をおかず再度同様のテストを実施した。1回目との変化がより明確となるよう同じテスト問題に手を加え、利用した。一例を挙げると、すでに述べた *Est-ce que je peux.....?* の場合、設問は1回目、「私はこの機械を使ってもよいですか」であったのを「私はコンサートに行ってもよいですか」へと変更した。全く同じではないが同質の試験問題により、結果の均質性を求めた結果である。すなわち、問題は異なるが、そこで出題されている語彙、文型は前回と全く同じものである。但し、会話文型5問のみ新たな出題として新たに加えたが、それもまた、フランスでの短期滞在の影響を推しはかるためであった。

まず、結果を簡単に紹介しておきたい。

氏名	正答率	聞き取り正答数/問題数	聞き取り正答率	会話文正答数/問題数		会話文正答率	全体正答率
				10問	5問(新)		
A		44/46	95.7%	10/10	5/5	100%	96.7%
B		38/46	82.6%	10/10	5/5	100%	86.9%
C		32/46	69.6%	6/10	5/5	73.3%	70.5%
D		35/46	76.1%	6/10	4/5	66.7%	73.7%
E		42/46	91.3%	9/10	5/5	93.3%	91.8%
F		27/46	58.7%	5/10	5/5	66.7%	60.7%
G		30/46	65.2%	6/10	4/5	66.7%	65.6%
H		22/46	47.8%	8/10	5/5	86.7%	57.4%



人 A ~ H の変化を見ると、聴解力 2 回目テストにおいて、前出のグラフが示すように、3 名が 1 回目比して低下している。

それは、しばらくでも海外に滞在すれば語学的にも何らかの形で肯定的にフィードバックされるはずと思い込んでいた傾向を裏切る現象であり、興味深い。これら 3 名は共には寮に滞在したということ以外にとりわけ共通点はない。この現象は、フランス語の理解力が低下したと考えるより、むしろ何ら進歩をみることがなかったか、もしくは試験問題構成の際の語彙の選択に起因する偶発的結果によって生じたものと捉えるべきと考えている。勿論、ホームステイをした学生にとっては、他の学生に比して日常的にフランス語を耳にする機会がかなり多かったことは事実であり、それもまた影響を与えた可能性は大であろう。

ホームステイしたのは、8 名中 3 名であった。帰国後、ファミリーとどれくらいフランス語でコミュニケーションを交わす時間があったかを尋ねると、ほぼ平均的に、一日 2 時間から 3 時間であった。すなわち、研修中、25 時間程度はフランス語をコミュニケーションの手段とする生活を送ったわけである。だからと言って、3 名のホームステイ体験を均質なものと見なすことは出来ず、家庭によって、当然受け入れ方には違いがあり、家族同様親しく受け入れてくれた家庭、また、事務的とまでは言わないにせよ、そうでない家庭もある。また、ある家庭では、学生の知らない語が会話に出てくる度に、ノートをとるよう指示してくれた親切な(?) 家庭もあり、三者三様であり、ホームステイ体験も等質のものとして扱うことはできない。一般的には、寮滞在者より、語学学習に関しては恵まれた環境にあったことは疑えない。しかし、ホームステイが、フランス語学習にとってはよりよい環境であったことは事実であるが、寮でのコミュニケーションに多く母国語に頼ったが故に、フランス語理解力に低下をもたらしたと結論づけるのも早計であろう。類推の域を出ないと言ってよい。これに関しては、数値的な検討が必要と思われる。

ほぼ全員が同等もしくは向上を示しているのは会話文の理解である。会話文に関しては、Ça fait combien? 「おいくらですか?」Je suis de Tokyo. 「私は東京から来ました」Je vous en prie. 「どういたしまして」「どうぞ」A demain! 「じゃ、明日」S'il vous plaît 「ちょっとお願いします」「…を下さい」Vous avez des questions? 「質問はありますか」の 5 つ新たに加えた。その他の 10 問は 1 回目と 2 回目は同じ問題を用いた。新たに加えた問題の正答率は 95% であった。加えられたのはあいさつ言葉、買い物、さらに大学の授業で必ずと言ってよいほどよく用いられる表現であり、このような日常生活において繰り返し使用される会話文型の理解は、それらが極めて平易な文型であることもあり、短時間の海外滞在であっても、比較的順調に、難なく、習得できるものであることを示している。

全体としては、聴解力の正答数は 267 から 270 (101%)、また会話文型は (新しく付け加えた 5 問は除外) 50 から 60 (120%) の上昇となっている。聴解力ほとんど誤差の範囲と言ってよいと考えるが、会話文型理解に関しては、すでに述べたように全体としてかなり向上していると言ってよい。それは、帰国後に実施したアンケート結果にも表れている。「現地でもっとも頻繁に用いたフランス語はどのような言葉ですか」という問いに対して全員が「あいさつことば」を答えていることでもわかるが、これはむしろ当然であり、予想通りの結果と思われる。

逆に、日常性からやや離れたことばに関しては、意識的に学

習の機会を持つようにしなければ習得できないものであることを端的に示している。テスト問題の第 6 部における 2 回目の正答率の低下は、それを証明している。() 内は正しく答えた被験者の数である。また、グラフは問題別生徒率の変化を示したものである。

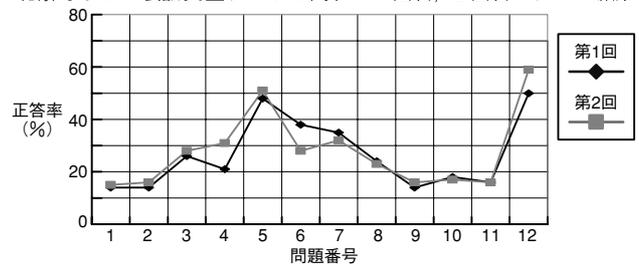
第 1 回目

- Ex.1 Je vais au Japon. (8)
Ex.2 Vous allez à Paris. (8)
Ex.3 Vous travaillez dans une banque? (8)
Ex.4/5 Nous allons (On va) au restaurant? (6)
Ex.6. Je vais en Italie. (8)

第 2 回目

- Ex.1 Je vais au cinéma. (8)
Ex.2. Vous allez à l'école. (7)
Ex.3. Vous allez à la mer? (5)
Ex.4/5. Nous allons (On va) à la campagne? (7)
Ex.6 Je vais en Angleterre. (1)

聴解ならびに会話文型テストに関する 1 回目、2 回目のテスト結果



1 回目から 2 回目の正答率の低下が、Angleterre 「イギリス」が理解できなかったことに起因することは明白である。それは社会実習参加者が現地における研修期間中 Angleterre を学ぶ機会がなかったことを意味している。参加者が約 2 週間現地で使用した教科書にも Angleterre は取り上げられていない。また、banque は英語からの類推で分かる語であるが la mer 「海」はそういうわけにはいかず、若干正答率が下がったものと思われる。

研修校で用いられた教科書は、*Connexions Niveau 1* (Didier, 2004) であった。受講期間が 2 週間であり、15 頁まで進んだにすぎない。既習事項は、「あいさつ」「名前を尋ねる」「数詞 (1 ~ 8)」「Oui, Non, D'accord などの応答に関する基本表現」「フランスの著名な都市、観光地」「氏名の固有名詞、Emma など 20」「国籍、(Anglais また Anglreterre は取り上げられていない)」「être 動詞 (je suis, vous êtes)」など、極めて限られた内容であった。受講期間中において実施された小テストを見た限りにおいても、上記に関して理解度を確認するものであった。今回、出発前、帰国後に実施した聴解力テストの方が、語彙的にも文型的にも、より多岐にわたっており、フランスでの授業は、内容的に考慮すると、聴解力の向上へ直接影響を及ぼすことは余りなかったのではないと思われる。

これらのことは、聴解テストにおいて 1 回目から 2 回目への正答率にマイナス要因として大きく影響を及ぼしたのは Angleterre、また la mer であることを物語っており、Angleterre 以外の国名、France や Canada, Chine, Italie など、日本語からも類推できるような既習単語であれば、全体として正答率はより向上していたことを暗に示しており、2 回目のテスト成績が示す以上に参加者の聴解力が向上したことは確実である。

海外滞在においては、日常的に接する機会が多い単語であればあるほど自然に覚える。だが、逆に日常性の遠い単語であればあるほど、当然のこと語学力としては獲得しにくいものであり、それについては、国内の学習者と比較しても何ら言語学習環境により恵まれた状況にあるとは決して言い得ない。Angleterre の理解度は、ほんの一例に過ぎないが、それを示している。第6部とは異なり、第5部においてはかなり正答率が上昇している。これについても簡単に検討しておこう。

第5部において1回目テストにおいて最も多く誤りが見られたのは、Exercice 7の *Ils ne sont pas libres ce soir.* である。Exercice 7の選択肢である7つのフランス語文のいずれもSVAの文型であり、差異は主として対格である属詞の *content/fatigue/bleu/libre/content/pret* にある。(解答を誤った5名の中、3名は大学での学習時間が少なく、否定文に関する知識が不十分であり、それが故の誤りである可能性も捨てきれないが、形容詞 *libre* も理解し得なかったことは明らかである。) 5名中2名は *content-libre* のとり違い、1名には *libre/bleu* の混同が見られた。また2名は未解答であった。(その他の2名は、いずれも *content* と取り違えている。) 語彙のみに限定するなら、*libre-content/bleu* の混同であり、これらの語彙の意味が正しく把握されていないことを示している。但し、興味深いのは2回目テストにおいて、1名のみが *content/fatigué* の混同をおかしたにすぎず、正解率は7名に達しており、*content/fatigué/clair/libre/prêt* のパラダイムへの理解に向上が見られるが、*fatigué* 「疲れた」はフランス語学習者がしばらくフランスに滞在しても必ず何度も耳にする語であるということが作用していると考えられる。

聴解力の1回目ならびに2回目テストの間に生じた変化を以上簡単に検討してきたが、2回目のテストにおいて、会話文型のテストほどには向上が見られないのは、Angleterre がマイナス要因となったと考えられる。それを除外すれば、全体としては、ある程度の向上はあったということができよう。

会話文型に関しては、8名の参加者全体に向上が見られた。テスト問題に選んだ文型は、日常の挨拶に用いられるフランス語文ならびに教室で用いられる可能性の多い文を選んだ。

全体として、正答率は $\frac{30}{60}$ から $\frac{60}{60}$ へと向上した。また、新たに加えた5つのフランス語文については正答率が95%に達したのはすでに見た通りである。これについては、参加者から得た興味深いアンケート結果があるので、紹介しておきたい。

「現地でも頻繁に用いたフランス語」「出発前には知らなかった言葉、表現でフランス滞在中に習得したもの」についてアンケートにより参加者に問いかけたところ、前者については、*bonjour*(5)、*a demain, ça va?*(3) *au revoir*(3)、*bonne journée* などの挨拶ことば、数詞、*jambon, limonade, bonbon, fromage* などの飲食物、*non merci, merci*(5)、*pardon*(3)、*combien?*、*s'il vous plaît*(2)、*très bien je suis..... comment allez-vous?*、*d'accord, excusez-moi* など、また後者に関しては、*anchois, où est.....? salut, comment t'appelles-tu? excusez-moi*(2)、*je m'appelle, je suis né.*(2)、*j'ai assez mangé où sont les toilettes?* などが挙げられた。なお、()内には、複数回答のあった語に限り、その回数を記入しておいた。

これを見ても分かるように、当然のことながら、日常のあいさつ、初対面のあいさつ、また自己紹介に関する表現を中心にリストアップしている。これは、テストにおける会話文型の理解の向上を導く重要な要因となっている。しかも、過去形の文型が挙げられているのも興味深い。なぜなら、授業においては、

現在形の習得が中心となり、未来また過去時制については、残念ながら疎かになりがちな学習事項であり、このような表現も生活の中で学んだことを示している。しかも、大学の授業ではなかなかマスターしてもらえない複合過去形 *j'ai assez mangé* 「十分いただきました」を挙げた学生はホームステイしており、この表現を食事の際に必要なに迫られ、学び、覚えたものであろう。

また、研修校においても、あいさつに関する表現(すべてリストアップするのは避けるが、通常日常生活で使用するあいさつことばはほとんど網羅している)の習得に相当力を入れたことが教科書また小テストからも見て取れる。日常生活のみでなく、授業でも学び、教室でも生活の一部として使用したのである。

会話文型における10問は、上記にリストアップされたあいさつ言葉(*salut, au revoir, bonjour, ça va* など)とかなりの部分重複しており、あいさつ言葉は短期の滞在でも順調に学習されるものであることを示しており、それが正答率アップにつながっている。また、2回目に付け加えた *je suis....., à demain, s'il vous plaît* なども上記アンケートに複数回リストアップされており、95%という高い正答率を生み出す結果となっているものと言える。

すなわち、予想されたことではあるが、日常生活において多 사용되는あいさつ言葉やサバイバルフランス語とも言える *où sont les toilettes?* 「トイレはどこですか」などは、順調に理解したことを示している。

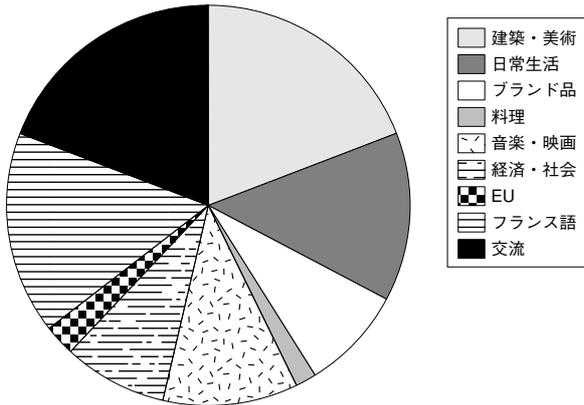
3. 文化的関心

参加者希望者(18名)の中、不思議なことにフランス語を受講していない学生が多数を占めた。大学からの財政的援助はあるにせよ、学生自身それ相当の経済的出費を覚悟して参加する以上、参加希望の動機が不明であり、奇異と言えれば誇張にすぎないが、担当者としては、やや理解しがたい面であった。日頃からフランス語を学び、ことばのみでなく、フランスの文化、社会に関心を持ち、もっと身近に接したい、体験したいということであるならば、それも理解できるのだが、本学においてフランス語を学習していない学生にとってのフランスとは果たして何なのか? 参加を希望した学生に対し、参加の動機を尋ねたところ、ほとんどが「ヨーロッパの町並みに関心があります」などの回答が多く、非常に漠然としたものであった。選考にもれた学生の中で、その後イギリスやその他の国の社会実習に応募した学生がいたことも、参加希望者とフランスをつなぐ糸は非常に希薄かつ漠然としたものであったことを物語っている。言い換えると、ヨーロッパであればどこでもよい、また海外研修ならどこでもよいということなのであろうか? フランスの場合、観光ポスターや、TV映画で眼にしたヨーロッパの町並みや雰囲気は漠然と惹かれたということなのであろう。とりわけ中国からの留学生にこの傾向がやや強く見られたように思われる。

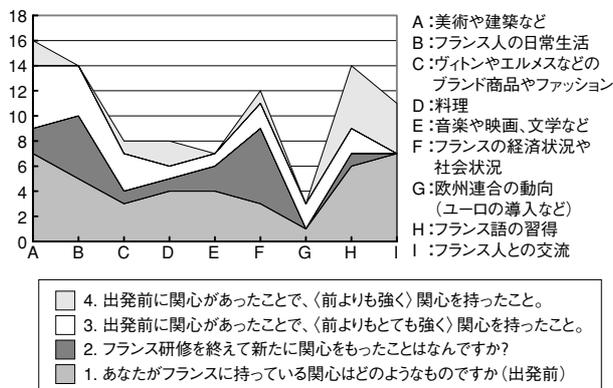
以下は学生に対して実施したアンケートより作成した資料である。出発以前に学生はフランスの何に関心を持っているのか、また帰国後、フランスに対する関心に変化があったのかどうかを調査したものである。

次頁のグラフ1は、出発前にいかなる側面に興味があるかを図表で示したものであり、グラフ2は、それを帰国後の変化という観点から捉え、図表化したものである。また、「研修後の関心の推移」は、研修前から研修後において、参加者のフランスへの関心がどのように変化したかを調べた結果である。

グラフ1：フランスに関して持っている関心（出発前/複数回答可）



グラフ2：研修後の関心の推移



グラフを見ても分かるように、帰国後、「新たに関心を持った項目」として最も多くの学生が挙げているのは「B:フランス人の日常生活」「F:フランスの経済・社会状況」であり、また、「出発前よりも強く関心を持った項目」としては「H:フランス語の習得」「I:フランス人との交流」が際立っている。出発前には極めて関心の薄かった「F:フランスの経済・社会状況」に対して、帰国後多くの参加者があらたに関心を示している事実は、当然フランス社会を客観的に理解したいという気持ちの表れだろう。また、よりフランス語の習得の必要性を感じ、また現地の人たちと交流を深めたいとの希望は、フランスまたはフランス人と日常的な交流をしたいとの気持ちが高まったことを示している。同時に、それは研修に対し参加者全員が肯定的な評価を与えていることとも符号する。すなわち、滞在が退屈で、実りなきものと判断するならば、生活や言語習得に対する関心は非積極的なものとなるだろう。

語学的な進歩にもまして、参加者が、文化・社会・フランス語に対して、参加者がより積極的な関心を示したことが、実は研修の最も大きな成果ではなかったかと担当者としては自問している。このような自発性の生じ得ないところでは、学習の成果は生まれ得ないものであり、実は、教え、学ぶということの成否は、一重にこの点にかかっていることは誰も否定できないだろう。すなわち、海外実習は、通常言われるように、学習へのモチベーションを高めるには有効であり、これについては本学の学生も例外ではない。

終わりに

予想されなかったわけではないが、僅か18日間の滞在においてフランス語力が総体的かつ飛躍的に向上するには至らなかった。8名を全体としてみると、聴解力に関しては、ほんの僅か、また会話文型の理解については若干の向上が見られたにすぎず、また、たとえ2回目のテストにおいて、5つ新たに加えた会話文型については、ほとんど全員が正しい理解を示したにせよ、総体として、語学的な進歩また向上を数値的なもので推し量る場合、それは僅なものとは判断せざるを得ない程度のものであろう。

しかしながら、外国語をコミュニケーションの手段として用いる生活を送り、その結果、いくつかの日常生活用語を自然に習得し得たということは、参加者にとって、重要なことであるとも言えよう。ここで、2001年に参加した2名の本学の学生についてもうひとつの別のエピソードを紹介しておきたい。

当初、極く簡単なフランス語でも凍りついたように全く反応できなかった2名であったが、帰国便の機内で、客室乗務員に尋ねられても、パニックも起こさず、関西空港到着時に、何と「先生、イエス yes の代わりにウイ oui しか出なくなりました」と、やや面映ゆい様子で、語ったのである。すなわち、それは、研修が、彼女達が日本において教室で何度も何度も繰り返し学んだ簡単な言葉も、とりわけ到着直後、現地では使うにいたらず、それを何日間の滞在の結果漸く使える言葉として習得するきっかけとなったことを示している。外国語習得は実は教科書の中にはなく、他者との関係性の構築の中にある。それは、小さな一歩かもしれないが、当事者にとっては重要な進歩であり、自信へと導くものなのである。使われないうままに退化していた身体的機能が、リハビリを経て、動き出す過程に似ている。日本語のみの生活の中におかれた学生は、かなりの努力をしない限り、この身体的機能を眠りから覚ますことはできない。もちろん、身体的能力とは、この場合、外国語における、または外国語によるコミュニケーション能力であり、話し言葉として外国語を用いる際に必要となる言語能力に欠かせない回路の活性化のことである。

2001年度、ならびに2004年度の参加者を比較すると、後者は格段にフランス語のコミュニケーションにおいて柔軟であった。少なくとも「凍りつく」ような場面にはほとんど遭遇しなかった。勿論、このような場合、フランス人が好んで使用する語を借りるなら、それは、個々の学生の sensibilité 「感性」 また mentalité 「精神構造」 の違いに起因するとも言うべきであろうが、それだけでもなさそうに思えるのである。というのは、2002年以降、フランス語講座の担当者として、少なくとも授業方針に、根底的に言えば誇張になるが、変更を加え、極力、日本語によるフランス語の説明を避け(かつての第2外国語の授業は、ほとんどの場合、授業時間は、日本人による、日本語で解説される授業であり、終始日本語を聞いて過ごす外国語の授業であったと言ってもあながち言いすぎではないように思う)、とにかく会話文型を繰り返し発音することにより(それは、あたかも野球選手が素振りをするさまを思い出させるのだが)、音声重視の授業へと転換を図った経緯がある。2001年度参加者が、1年次において使用した教科書は *Passerport pour le français* 『フランス語へのパスポート』ならびに『まんがでフランス語』であった。いずれもフランス語の基本的な文法の理解を求めた教科書であり、現在用いている *Un peu de français* (全面改訂版) とはかなり傾向が異なる。

外国語をはじめて学ぶ際、構文や文法事項の理解を多く求めると、そこに力点が置かれる余り、例えば子どもが言葉を耳から聞き、それを模倣しつつ発声し、少しずつ学ぶような感覚から学習者を遠ざけてしまうのではなからうか。現在の方法は、むしろアメリカの外交官が渡仏前にフランス語学習をする際、集中的に用いたといわれる *Basic Spoken French* (ランゲージサービス、1971) を思い出させ、一時期流行したパターン・プラクティスによる学習に近いと言ってよい。但し、効果的ではあるにせよ、担当者としては、それを全面的に受け入れているわけではなく、学習方法の単調さは否定し得ないものであり、学習方法としては改善・修正の必要な部分は当然ある。実際、視聴覚教材などの導入によりその単調さを補うための工夫はせざるを得ないのである。

「話し言葉」としての外国語習得には、単純にいうなら音声重視は不可欠な要素である。しかも、外国語学習における導入段階のあり方は、とりわけ大きな重要性を持つのではないと思われる。最初から、余り理知的な理解を多く要求すると、音声的な側面が疎かとなり、それが眠ったままの状態で後々も学習が続いてしまうのではなからうか。2001年度の成績も優秀であった学生は、文法もよく理解し、語彙も少なからず習得したにせよ、やはり初段階、すなわち、一年次において音声重視の教育がもっと求められていた言わなければならない。言語学を援用するなら、「深層構造と表層構造を通して、各文の意味を音に、また音を意味に関係づける」⁴⁾ 努力がもっとなされるべきであったということであろう。

最後に、語学的な進歩とともに、参加者のフランス、フランスの社会や文化に対する関心についても確認しておかねばならない。参加者は、帰国後、美術や建築は言うまでも無く、フランス語、フランスの日常生活、経済・社会状況にあらためて関心を抱くこととなった。それは、日本にいる限り得ることが難しい学習また異文化理解へのモチベーションとなっていることは明白である。帰国後、参加者を中心として「フランス(語)サークル」が結成され、また参加者の中、1名がロンドンに留学し(ロンドンを選んだのは語学的な理由である。ロンドン留

学は、今回の社会実習が後押しする結果となったようである)、また、フランスへの留学を希望する学生も現在1名おり、留学生試験に備えて、あらためてフランス語の学習の必要性を強く感じているようである。

異文化理解、国際化、またグローバルゼーションなどのことばが、新聞、テレビから大学のパンフレットにまで、まるで流行に乗り遅れまいとするかのように、あらゆる生活シーンにおいて飛び交っている。勿論それを軽薄な流行として片付けてしまうつもりは毛頭ないが、必要なのは、学生に対して、具体的かつ地道な教育活動の中で、そのような学習体験への可能性や機会を提供することではないかと考えている。余談になるが、昨年研修時に知り合うこととなったフランス人学生が、今夏2ヶ月以上に渡って金沢に滞在し、参加者と旧交を暖め、サークルの学生のみならずゼミやフランス語受講の学生と盛んに交流を行うこととなった。しかも、この後も、この学生を窓口として、本学の学生数名とパリ・ソルボンヌ大学に在籍する学生たちとメールなどで交流することになっている。来訪と交流は思いがけない成果であったが、このような交流の積み重ねが、学生の異文化理解また語学学習の貴重な活性化剤となるものと信じている。

2005年度、本学に「国際・観光コース」が設置された。石川県の温泉に、アジアの国々からの観光客を呼び寄せることが現在地元の観光業界の一大命題になっているが、観光は、相変わらず双方向のものであり続けるだろうし、温泉に関してのみ言うなら、フランスにも、日本とは異なったギリシャ時代以来の伝統をうけつぐタラソセラピー *Thalassothérapie* があり、非常に水準の高い健康施設であると同時に、フランスらしく、文化的な活動を重視した活動⁵⁾ とリンクした施設となっており、温泉文化が決して日本のみのものではないことを雄弁に物語っている。観光もまたグローバルゼーションの波から免れることはできない。学生には広い視野をもって学んでもらいたいと常々願っているが、このような社会実習が学生の視野を広げ、今後の学習に僅かでも役立つことを願っている。

注：

- 1) 齊藤兆史、野崎敏『英語のたぐらみ、フランス語のたぐらみ』、東京大学出版会、2004、p.22
- 2) ジョルジュ・マトレ『マトレ初級仏辞典(復刻版)』駿河台出版社、1978、préface x xix
- 3) *Un peu de français* において用いられている語を全てリストアップすることは避けるが、語数のみを以下に示しておきたい。動詞は不定詞を1語と数え、形容詞、名詞の男性形・女性形も2語とはせず1語と見なした。名詞については、飲食物関連：15語、余暇、趣味関連：14語、身分、職業関連：7語、家族、友人関連：6語、自然関連：4語、日常生活品関連：12語、固有名詞：23語(国籍、氏名も含む)、人称代名詞：14語であり、基数詞：10語、形容詞：16語(指示代名詞、所有形容詞を含む)、動詞：23語、準助動詞：2語、限定辞：9語(但し、冠詞縮約形は前置詞として数える)、前置詞、数量副詞：6語となっている。語彙的には極めて限定された内容であるが、実用的な日常フランス語会話の入門書としては、妥当に思われる。同書の語彙の98%以上が、『マトレ初級仏辞典』に収録された基本単語である。
- 4) N.スミス&D.ウイルズ、山田義昭、土居元子訳、今井邦彦監訳

『現代言語学』新曜社、1996、p.98

- 5) フランスのタラソセラピーについて触れる紙幅の余裕は残念ながら無いが、一例を紹介すると、健康増進と同時に、「火山、ピレーネー山脈、失われた湖、氷河などの手付かずの自然、野生動物、修道院や城郭、城壁の町、史跡などを滞在中に訪れてください」(<http://eurothermes.com/forme/index.htm>, 2004年12月14日取得)などの歌い文句にも示されるように、多くの場合、温泉プラスアルファの活動を謳っている。ちなみに、ヨーロッパの観光嗜好の調査結果を見ると、海、山、スポーツが、40%、美術館や歴史、文化に関心をもつ *city tourism* が全体の3分の1であり、健康・スポーツは3%となっている。(City Tourism & Culture The European Experience, World Tourism Organization 2005, p.22) この結果も、温泉などの健康と、文化、自然、スポーツなどがリンクした形の観光が必要であることを示している。その意味においては、スペインと並んで世界最多の世界遺産を29箇所持ち、しかも全国に8000の美術館、また600の「フランスで最も美しい村」、また100箇所「芸術と歴史の都市」を有するフランスは、非常に豊かな観光資源を有することは疑いを入れない。年間の観光客の入りこみが、スペインをかなり引き離し1位ということも首肯できる。最近、加賀屋旅館の小田孝信社長が角俣三郎美術館を開設するにあたり「温泉に入るだけ

でなく、まちなかの散策も楽しみたいという宿泊客が多くなった」(北國新聞, 2005年9月29日付, 朝刊)と述べておられるように, 石川県の温泉地も, 温泉プラスアルファとして知的関心に応えるような文化的施設, 活動が必要とされているといえる。また, 温泉と, 高山, 松本両市の観光を組み合わせたツアーが韓国の旅行代理店により現実に計画されているが(北國新聞, 2005年10月25日付, 朝刊), 今後, 県内のみにとこだわらず, 県外の観光地との連携を進め, それにより県内の温泉をはじめとする観光地への誘客を積極的に進めるべきではないかと考えられる。当然, 京都や奈良, 東京などとの連携を視野に入れるべきことは明らかである。さらに, 今後増加すると予想される熟高年層の嗜好が, JTBの調査によれば, 1位「自然風景観光」, 2位「歴史文化観光」, 3位「美術館・博物館見学」となっていることを考え合わせると, 従来のような美食と温泉のみでは, 集客の面において, 今後の苦戦が予想されるのではないだろうか。団塊の世代の退職期を2007年に控え, ゴルフ場などのスポーツ施設だけではなく, 後背地の歴史的, 文化的施設との連携を積極的に検討しなければならないことは明らかだし, またより若い層には, 海上スポーツや乗馬など, 観光地として複合的な楽しみを与えるものである必要性がありそうだ。観光地として先行しているヨーロッパのありようはそれを示している。

参考文献

- 岩間直文 *Un peu de français*『話したくなるフランス語』朝日出版, 1995
- Georges MATORÉ『マトレ初級仏辞典』(復刻版), 駿河台出版社, 1978
- L.プリエト, 山之内貴美夫訳『記号学原理』勁草書房, 1981
- N.スミス & D.ウिल्ズ, 山田義昭, 土居元子訳, 今井邦彦監訳『現代言語学』新曜社, 1996
- Régine Mérieux, Yves Loiseau, *Connexions Méthode de français niveau I* Didier, 2004
- 齊藤兆史, 野崎歆『英語のたくらみ, フランス語のたわむれ』東京大学出版会, 2004
- How to source Japan- A Major tourist market for the silk road* World Tourism Organization, 2003
- L'intégration européenne à l'ère de l'élargissement de l'Union européenne et le développement du tourisme*, Organisation mondiale du tourisme, 2003

